平成 21 年度喜多方市小学校農業科シンポジウム

基調講演「地域の活性化を図る小学校農業科」の概要

福島大学行政政策学類大学　教授　境野健兒先生

Ⅰ　はじめに――――農に生かされて

今教育長さんからもご紹介いただきましたが，私は福島に来てから 33 年なります。また，学校給食に関わってからは 28 年が経ちました。この間，調査研究のために熱塩加納の辺りを熊のように出没していますが，しかし畑は荒らしません。言わば，その畑の成果を学んで行こうとこの喜多方には大分お世話になってきました。来週もまた学生と一緒に熱塩加納に入ります。私も来年の 3 月で退職しますので，自分の学びの集大成をできれば喜多方でやりたいという思いでおりまして，学生と一緒に新鮮な気持ちで来週もまた学んでいこうと思っています。

さて，今日のテーマにもある小学校農業科は「地域の活性化を図る」というよりも，むしろ「地域をつくっていく」ことにつながっていくのではないか，そのような可能性をたくさん秘めているのではないかということを，みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

先ほど，熱塩小学校の子どもたちの農業科の学習の取組みを生き生きと自分たちの言葉を選びながら発表している姿をみて，私は非常に感動したのですけれども，みなさんはどのような思いでご覧になったでしょうか。いろいろあると思うのですが，私には大変感慨深いものがあるんです。

実は，私の 35 歳になる息子が血液の病気で国立小児病院にかかった時に，担当の先生から「境野さん，現代の医学ではこの子の血液の病気は治せません。」と言われました。「先生この子の生かされる道は何なのですか。」と質問すると，その先生は「自然のきれいな空気と食べ物です。」と言いました。私は息子を生かす道はこれしかないのかということから，農業に対して非常に深く関心をもつようになりました。息子が病気であるが故に，「農業」が父親である私に課せられた課題でもあり，教えられたことでもあったわけです。

今日，子どもたちの農業の営みの話を聞く時，当時の私はあるいは小さい頃の私は本当にそういうことが分かっていたのか，コンクリートの生活の中で「種を蒔けば花が咲き実がなる」ということを本当に知っていたのかということを考えさせられ，恥ずかしい話ほとんど分からないで来ました。だから，今の子どもたちの「命を生み出すものが食べ物にはある」というメッセージがとても心に響くわけです。

私も日常的には 50 坪ぐらいの家庭菜園をしています。今はサンドマメの芽がちょっと出てきました。大根もぐんぐんと大きくなってきています。私はどんなに

忙しくとも，畑に出ると心が休まります。何故だろうと考えますと，人と人との関係というものはとても辛いところがあります。先ほど子どもたちが「野菜は自分で育つんだ」，あるいはそれを支えるのが「育てる」ということだとも言っていました。ですから，野菜がぐんぐんと育っている姿を，つまり野菜自身に生命力があってそこに触れることによって，私自身の気持ちが和らいでいくということになるのではないかと思います。そういうことで子どもたちの話がビンビンと伝わってきました。

「土ってあったかいね」という本を今西祐行(いまにしすけゆき・児童文学作家・国語教科書教材「一つの花」「ヒロシマの歌」の作者・1923～2004・「土ってあったかいね」は 1987 年，神奈川県藤野町の自宅に地元の農家の協力を得て開いた菅井農業小学校について書かれた本)さんは書いています。彼は「作物に自分の足音を聞かせるんだ」ということを日々の暮らしの中でとても大事にした人です。「作物に人間の足音が聞こえる」ということに疑問をもつ人もいると思いますが，実は作物を育てるという人間の営みはそういう関係の中にあり，その中で生かされている私自身を大変嬉しくうれしく思う次第です。

今日は全体こういう流れでお話をしたいと思っているのは，先ほどの子どもたちが語っている中でも見られましたが，小学校農業科が子どもたちの育ちのどういう内容，あるいはどういう意味をもっているのかということについて大人である私たちが一緒に考えていきたいと思います。

Ⅱ　子どもの育ちを農で拓く

1　学びの転換（再発見）

農業というものに取組んで行くことを喜多方市の小学校では，特区で教科としてやり始めましたけれども，今年の 4 月からは総合的な学習の時間の一環としての位置づけで，教科と同じようなに重視してやって行こうということで，現在 14 校まで来ているという話がありました。そういうことを学校でやることによって，また地域全体に学校を開くことによって，「子どもたちの育ち」をどう支えていくのか，あるいは地域社会にとってどのような意味があるのかということをまず一緒に考えていきたいと思い，話題提供をさせていただきます。

私は感覚的ではありますが，子どもたちが米や野菜を育てる世界はすごいなあと思っています。それは，みなさんから見れば単に子どもたちが米や野菜をつくっている程度にしか見えないかもしれませんが，「農業科で学ぶという機会を与えられ」「農業を経験できる」ということは，とても素晴らしいことです。

今の私たちの学びの世界を考えた時，農業科の「なすことによって学ぶ」ということ，つまりいろいろやってみて学ぶという世界もあるのではないかということを経験することが重要な意味をもっているのではないかと思います。ところが，私たちはもしかしたらこれとは対照的な「文字で伝えて」「知識を伝えて」分からせるという世界に，ずっと子どもたちをおいてきたのではないかと思います。

実は福島大学や私のいる行政政策学類でも，これからの大学教育の中で実習を

重視しよう，つまり地域のことは地域に入って聞いてあるいは自分たちでやってみて，そして学んでいこうとしています。学類では，地主の方と交渉して，大学の正門の脇の遊休農地を学生の農業体験の実習地にすることを計画し，来年の 4 月から動くのではないかと思います。

では，なぜこういうことを大切にするかということですが，それは私たちが「経験による学び」ということをこれまで軽視してきたのではないかということがあるわけです。内山節(うちやまたかし・哲学者・1955～・行動する哲学者と東京と群馬県上野村に拠点をもって活動している・上野村では畑を耕し森を歩きながら自然とともに生活している)さんは，近代以降二つの「学び」があると言っています。一つは「文字による学問」であり，もう一つは「無文字による学問」だということです。特に近代以降，文字による学問が非常に幅を利かせ，無文字による学問が軽視され，その結果人間の育ちを非常にいびつなものにしてしまったのではないかということです。

このことは，先ほど市長さんが中村桂子さんの一文を紹介し，それに着眼して喜多方市で小学校農業科をつくったというお話をなさいましたが，その文脈にもつながっていくのではないかと思います。中村さんは日本経済新聞に「小学校で農業を必修にというのは私の考えなのです。戦後の日本は豊かで便利な国になりましたが，何かを失ったとみんな感じています。それは生き物としての時間の流れにそむき，いつも追い立てられている現実への不安です。では，どうしたらよいのでしょうか。よく心の教育と言われますが，実際には何をしたらいいか分からない。私たちの社会が失った時間の流れを取り戻すための具体的な手段が農業なのです。」と書いています。その後 2008 年には，また日本経済新聞に「命から発想する生き方」という一文を書いています。そこでは，「人間社会の経済の発展には技術が必要だった。そのために技術を支える人間を育てるという一連の流れで考えてきた。本当にそれでいいのだろうか。そうではなく人間の側から考えてみてはどうか。」という題提提供をしています。「人間の側からいろいろ考えてみると，例えば環境問題や農業問題などいろいろある。その中で大事なことは，必ずそういう世界に関わる人が増えてくる，あるいは人と人とが関わる世界が増えてくる。そして，その中で人が生きる力を蓄えていくんだ。これこそがこれからの時代の流れなんだ」ということを中村さんは言っているわけです。

私はこの喜多方の小学校農業科の実践を通して常に思うのは，そういう生きる力を地域や学校でつくりだしているのではないかということです。

2 喜多方市の先駆的な気づき

余談ですが，今東京の学校では「修学旅行でどこに子どもたちを連れて行こうか」「農村に連れて行こうじゃないか」，あるいは「夏休みにグリーンツーリズムで子どもたちの体験を大事にしようじゃないか」ということで農業体験をさせようという動きが広がってきています。それは何かというと，「人と人との関わり合いの中で」あるいは「作物を育てる関わり合いの中で」人は育つということを，しっかりと子どもたちに伝えていこうじゃないかというメッセージではないかと思うわけです。

このような中，喜多方では自分たちの地域でお金をかけないでそういう世界ができている，あるいは足もとでそういうことを学べる世界ができているということが，実はとても大きな意味をもっているのではないかと思います。地域の人から見れば「小学校で農業科をやっているねぇ」「当然だねぇ」というように思うかもしれませんが，実はこの世界を組織するということは大変なことです。それを自分たちの地域や地域の人材を生かしながら,学校を開くことによって，この世界をつくってきているということです。

では,そういう中で子どもたちの何をいったい育てているのかということを,次に考えてみたいと思います。

Ⅲ　農の営みからの学びの豊かさ

1　農による学びの形態と“農業科”の位置

知識でお米の大事さやおいしさを教えようという取組みがあります。社会科の授業等がこれにあたります。また，新聞などでも，稲刈りをやったとか野菜の収穫祭をやったなど，いろいろ報道されています。先ほどの子どもたちが発表した内容で言えば，はじめと終わりだけをクローズアップして収穫祭として感謝の心を育てましようということです。

一方，農の営みに即して子どもたちに教えようという取組みは，大きく分けて二つあると思います。

一つは，農業小学校というものです。これはＪＡなどが中心となって，特に西日本で展開されていますけれども，土日型で一年間の農業の営みに即しながら農家の人の指導を受け，実際に作物を育てるという取組みです。

もう一つ喜多方市のように具体的知識を教えるというよりは，実際に農業をやらせるという取組みです。子どもたちが発表しましたので言うことはないのかもしれませんが,例えばお米ならば，お米づくりの年間指導計画ができています。これに沿って,「苗床づくり」や「種もみ蒔き」，田植えの時には「代かき」や条板での「田んぼの筋をつけ」などを，勿論支援員の協力を得てやっているわけです。あるいは,田押し車で草取りをする。イネも実をなすものですから必ず受粉をします。8 月の天気のいい日の朝には，イネの花の開花というものを観察することができます。それから収穫というように，ずうっと普通の農家のお米をつくっている人と同じように，あるいはそれ以上に手づくりで農業をやっているわけです。

そういうことがものすごい意味をもってきているのではないかということを，次にお話をしたいと思います。

2　学びの豊かさを支える

⑴　感性の世界を広げる

本当にそういう点では,「なすことによって学ぶ」という世界を喜多方の子どもたちは，本格的にやっているのではないかと思います。

そこで何を一体学んでいるのかということですが，これは多様にあると思います。先ほどの子どもたちの発表の中でもいろいろふれられていることですが，私

は野菜づくりやお米づくり過程で，とても大事な「豊かな感性」を育てているのではないかと思います。

例えば，先ほどお米を炊いてもちにした時の感触を「もちもち感」とか「もっちり感」とかいろいろな言葉で表現しています。つまり，口当たりとか味覚とかそういう世界ですね。

今，子どもたちはこういういろいろな味覚の世界というものをどれだけ分かっているのだろうか。これはそういう本当のおいしさという点で，例えばある子どもがこう書いています。「『今日から農業科が始まります。みなさん頑張りましょう』と言われましたが，『ええー，暑そうだしつらそうだしやりたくないなあ』と正直思っていました。でもやっぱり私の考えは当たっていました。トマトやキュウリはできたものしか家では出でこないのに，学校では土づくりからやることになりました。家でも私のおばあちゃんが野菜づくりをしていますが，私一度は手伝ったことなんかありませんでした。でも，やったことのない私でもみんなと一緒に頑張りました。そして，夏休み私は水くれ当番の日直で，赤いトマトがなっていました。そのトマトをもらって食べた時，私はこんなにおいしいトマトを初めて食べました。ものすごく甘くておいしかったです。」というものです。まあ，みなさんどういうふうに考えるでしょうね。私はこういうトマトの本当のおいしさを感覚的に分かると，そのあと「このトマトはおいしいなあ」「このトマトはおいしくないなあ」，つまり味覚でおいしさを判断できる子どもになるわけです。いつもまずいものを食べていると「これはうまい」というとそれまでなんです。

農業科は本当のうまさが分かることによって，子どもは野菜のおいしさが分かってくるのです。こういう世界を子どもが切り拓いていくのではないかと思います。先ほどトウモロコシやピーマンなど，嫌いなものが好きになったと子どもが言っていましたが，単に好きになったというのではなく，本当の味を知ることによって，ものを見ることができるようになったということです。

私は自分で言うのもおかしいんですが，私もいろいろなところへ行ってものを食べます。味覚ではないんですが，だいたい我が家で使っている醤油と違う外の醤油を使って食べると必ず口の中が荒れてくるんです。そして何でこんなに荒れるのだろうと思うんです。それは，実は醤油をつくっている味だけではないんですが，そういう素材がおいしさをつくっていて，すぐ分かるんです。ですから，農業科はそういう子どもたち自身の暮らしというものを非常に豊かにする世界を，たった１個のトマトが教えることになるのではないかと思います。

もっとすごいことがあります。匂いの世界ってどうなっているんだろうということです。実際
には，ネギの匂い，あるいはピーマンの匂い，青菜臭いにおい，みんなそれぞれ匂いがあります。

この前，会津短大の先生にお聞きしましたら，ネギを見せないで匂いを嗅がせたら，この匂いと実物のネギが今の学生は一致しないということでした。ネギそのものの匂いを感じる世界からずっと遠ざけられたているわけです。

今日も子どもたちの発表にありましたけれども，熱い夏，草むしりをしています。あの時に，やった人はだいたいどういう匂いがしてくるか分かるんです。ム

ウッとした土臭い，なんとなく青臭い匂いが漂って来るものです。いわば，そういう匂いを子どもたちは作業を通して自らのものにしてくるというのです。

私の卒業生で，卒論で花の匂いというものを研究したいという学生がいました。花には甘酸っぱい匂いがあったり甘い匂いがあったり，あるいは鼻をつんざくような変な匂いもある，いろいろな種類があります。どういうふうなことで子どもたちが，どんな匂いの感じ方をしているのかということを調べてみようとしたのですが素材がないのです。そこで，柏屋さんという薄皮饅頭のお店で出している「青い窓」という子どもたちの詩集の中から，花の匂いについての表現をずっと抜き出して調べてみたんです。そうしたらあまりないことが分かったんです。どういうものが多いかというと，美しいとか何色でかわいらしいとか，つまり形でものを見るという世界に，花があるということが分かりました。植物には植物なりの匂いがあるという，そういうことも奪われる中，喜多方の子どもたちは農業科の営みを通して強い感覚を磨くわけです。

⑵ 命を育む農の力

先ほどの子どもの発表の中にも，今年は泥んこ遊びをしたという話がありましたが，泥んこで戯れる子どもってすごいですよ。昔中学校の文化祭で真っ暗にしたお化け屋敷にコンニャクを置いてそこを歩かせる，そういうことがはやった時期がありますが，実はあのヌルヌル感というものは，子どもにとってはとても異質な感覚なんです。ですから，泥でヌルヌルしているというものは，みなさんはあのヌルヌルの中で遊んできたか大丈夫だと思いますが，子どもにとってはそう単純なものではないのです。

これは，農作業の段取りに従って小学校の子どもたちが詩や作文を書いたものですが，本当はこれを全部紹介すると，如何にイネをそろえるということはどういう育ち方をするのかということが見えてくるんですが，時間もありませんので一部だけ紹介します。「最初はぐにゃっと気持ちが悪い，でもねすぐ慣れていい気持ちになる。田植えは一石二鳥だ。気持ちはいいし，おいしいお米がたくさんできるから。」ヌルヌルという感覚は，泥に入ってみないと分からない，あるいは泥の中で石にぶつかって「それが石だ」ということに足の裏で気が付く。そういう体で感じる力も農業科では実は生み出しているのではないかと思います。

もう少し言いますと，先ほど子どもたちがいろいろ発表しましたが，イネや野菜が育つということは「１粒１粒の種が自分たちの命を育てることにつながっているのではないか」というとても大事なことをメッセージとして私たちに伝えているのではないかと思います。

例えば，先ほど出ましたが，細長い「かんどう」というカボチャですが，花が咲き受粉をし，そこにカボチャがなって行くわけです。あんな小さな種が栄養を吸いながらとても大きくなるわけです。そして，その種をとってまた乾燥させて来年植えると，また実をなしていくわけです。農業科ではこういう取組みをずっとしているわけです。先ほど子どもたちが「田んぼに引いた線の交差したところに，苗を植えて行きます。一箇所には苗を三本ずつ植えて行きます。指の第二関節の深さで植えて行きます。田植えでは，一箇所に植える苗の数と深さ，そして

すぐに植えることが大切になります。苗は私たちが種を蒔いて育てたものです。苗は青々と元気に育ち命をもちました。だから，わたしは田植えをしながら命を植えているんだなあと思って作業を進めていきます。そして植えた命は月日とともに成長し，秋には大人になって行きました。今年は 6 年生なので最後のお米づくりになります。6 年生全員がたくさん収穫できるようにと願っていました。」と言っていました。あるいは，3 年生はこうも言っています。「わたしは農業をやってきて，野菜から命をもらっていることが分かりました。だから，大切に育てれば野菜も甘くなって，とってもおいしくなると思いました。野菜も赤ちゃんの頃から，ずっと大切に育てられ人に役立つものになっていきます。野菜と同じで人間も母親に育ててもらって人に役立ようになって行く。野菜の母親は私たちだということが分かりました。命を育てる農業が大好きです。とっても楽しいです。」私は，このように作物を育てることを通して，命を育てるということを本当に言える小学生はすごいなあと思います。子どもたちが農業科を通して，作物を育てながら命を育てている。その命の糧をもらって自分たちの命を育んでもらっている,そういう自然あるいは野菜の生業，自分たちが生かされているということを子どもたちがつかんでいるということが大事ではないかと思います。

⑶ 地域に埋め込まれている知恵に学ぶ

それぱかりではなく私も聞いて驚いたんですが，畑でカラスにやられないように長靴を逆さに刺したり，　熱塩小学校では新聞紙に 4 ヵ所ぐらい石をおいて風が入ってくるようにして，新聞紙がパタパタ揺れるようにしたりしています。このように，カラスや鳥をよけるということを子どもたちがやっているということです。私は作物を育てるということを通して，人々が培ってきた知恵を子どもたちに伝えるという世界が生まれているんだなあと思います。子どもたちにとっても，自分たちにもそういう知恵や力があるのだということを知ることによって，実は子どもたち自身もの自分たちの世界を広げていくのではないかと思います。肥料のつくり方を学ぶ過程においも，先人の知恵から作物を育てるということを大変豊にしている。また，作物を育てるにはそういった力や知恵が必要なんだということも学んでいることは大変に重要なことだと思います。

あるいは，先ほど出ましたが,自分たちで育てたものを加工して，納豆や豆腐を作っているという学校もあります。そういうふうにして，自分たちで育てたものを加工して食べるという生活を自分たちのものにしている学校もあるわけです。

私たちや子どもたちは，食べる物は買うものであるという感覚を十分に育てられています。もっと味まで組織されていると言ってもいいと思います。食育というものが重視される中，ファストフードの味を学校の食育の時間に紹介し，その味を好きにさせるという形で来ているわけです。そういう意味で，喜多方の子どもたちは，農業科の学びを通して，本当の味を身につけながら，食の世界を広げて来ているのかなと思います。

⑷ 子ども自身が自分で学ぶ世界

私は,こういう学びの世界を考える時,先ほど「イネが育つのを支えているんだ」ということを子どもたちが言っていましたけれども，こういう農業を通した学び

とはどういう学びなのか，それは一言で言えば「自分が参加して自分でやりながら自分で学んでいる世界」ではないかと思います。

基本的に自分でやりながら自分で学ぶ世界というものを農業科を通して保障しているのではないかと思います。遊んでいるように見えながら，実はその中で非常に豊なものを子どもたちは学んでいると言っていいかと思います。そういう学びの機会を提供しているのも小学校農業科ではないのかなと思います。

4 農による学びを支える地域の力

1 お年寄りの出番と役割

こういうような子どもたちの豊かな学びの世界である農業科というものが，どうして喜多方でできるのか，それは一言で言いますと，「農業科を通して学校を地域に開いている」ということだと思います。もう少し言いますと，学校が地域の力を意図しながら，子どもたちの学びの世界を広げていると言ってよいのではないかと思います。

私も熱塩小学校や熊倉小学校，堂島小学校，つい最近では松山小学校の農業科支援員の方にお話を伺っていますが，だいたいどこに行っても若い人がいなくて，お年寄りばかりなんです。お年寄りが多いのです。そのことがけっして悪いわけではなく，そのお年寄りの方がなんでこんなに元気なのかなあと思うぐらい元気なんです。喜多方の小学校農業科の営みは，基本的には昔のやった農法なのです。ですから，学校の先生ができないんです。そうすると地域のお年寄りの出番の場なわけです。お年寄りの体にしみ込んでいる知恵が子どもたちのために役立つことになるわけです。

堂島小学校の場合には，20 数年間にわたって学校の田んぼの協力者という人がいるわけです。大字単位の地区の総会で 1 名ないし 2 名地区の担当者が決まっておりまして，その人たちがちゃんと子どもたちの米づくりに関わるという仕組みがずっとできているということです。こういう人が熱塩地区でも加納地区でもそうでしたが必ずいて，やれる可能性があったから農業科の取組みができたのではないかと思います。

松山小学校の場合には，松山公民館というものがありまして，その公民館のクラブに名前がちょっと違うかもしれませんが，「元気のもとクラブ」というのがあります。そこではいろんな野菜づくりをしていて，そういう人たちの力を松山小学校と組んで，子どもたちが野菜を育てる時に野菜づくりの指導をするわけです。

私は学校が開かれなければ，あるいは小学校農業科というものがつくられなければ，地域の古老の中に眠っている農の知恵や技といったものが陽を見ることはなかったと思っています。喜多方市で小学校農業科をつくることを通じて，お年寄りの出番と役割，機会が生まれたと思うのです。それがとても大きいし，そのことによってお年寄りと子どもたちの関わりが生まれたり，地域の人たちがとても元気になってきたりしたのではないかと思います。

私のところの卒業生で，介護老人ホームの事務をやっている卒業生がいますが，

2・3 年前老人が笑っている時の写真ということで何枚かもってきたんです。「どれが笑っている顔でしょうか。」とその人は言うんで，私たちはずっと写真を見たんですが，どれも笑っている顔には見えなくて普通の顔に見えたんです。あるいは寂しそうな顔に見えたんです。そしてその教え子が「ちょっと微笑んでいるように見える写真の向こうにだれがいると思いますか。」と学生たちに質問したんです。そうしましたら，みんな分からなかったのですが，その彼が「子どもがいる。」というのです。子どもたちを見る時，お年寄りはとってもいい顔をするというのです。

ある有名な人類学者が「子どもはあの世から来たり。老人はあの世に近い人だ。だから，あの世に近い者同士一緒に相見えると，言わば親しみが出てくるのではないか。」と，本当かどうかは分かりませんがそういうように言う方もいらっしゃいます。私も本当にそういう成果なのかなあと思ったりもしています。

私も幼老介護という，これは幼児施設と老人施設が一緒になっている施設なんですが，いろいろ見たりしているんですが，今そういうことが世の中の流れになっています。あるいは長野県なんかでは，託老と託幼が一緒になっている，幼児とお年寄りを一緒に預かる施設なんかもできています。このような施設をつくることによって，老人も元気になるし，幼児も育つということになります。そういうことを考えますと，喜多方の農業科というものはそういう施設をつくらなくても，年間 30 回とか 40 回とか，子どもたちとお年寄りとの関わり合いが生まれてきているわけです。そういう点で，地域の言わば力を生み出しているのではないかと思います。

2 地域の高校や地域の公民館との連携

もう一つ喜多方における農業科の取組みの特徴は，農業高校の生徒が小学校に行くことによっていろいろな関わりが生まれているということだと思います。市長さんから農業科の話が教育委員会にあって担当が先の見えなかった時，農業高校へ行っていろいろ相談したそうです。そこで農業高校の子どもたちのものを育てたり作ったりする姿を聞いて，これはやれると思ったそうです。そのような実感が農業科の中にはあるわけですけれども，高校生が折り折りに小学生と一緒に農の営みをするわけです。今小学生と高校生が交わるなどという世界がどこにあると思いますか。まずないですよ。でも，農業科というものを通して，地域の農業高校生と小学生が交わりを深めながら，小学生が自分たちのやっていることの自信を深めたり，あるいはお兄ちゃんやお姉ちゃんとの交わりの世界を深めたりしているわけです。

私のゼミ生も卒論で農業科がやりたいと喜多方に来ているわけですが，行くといろいろ話をしてくれます。今日はニンジンの種を蒔いたけれどもあんなに小さいとは思わなかったとか，子どもたちが 1 か所にたくさんの種を蒔き過ぎて支援員のお年寄りの方がその種をまた取り出したとか，今日はトウモロコシパーティーだったとか，生き生きと話すわけです。そういう中に，お年寄りのいろいろな関わり生まれて，そして励ましされて，自分なりの勉強を豊かにしていくとことにつながるぐらいの力を喜多方はもっているのではないかと思っています。

3 学校の空気が変わる

私がこの農業科実践で一番心配したのは学校の先生です。学校の先生は社会を教える，理科を教える，何々を教えるということをしていますが，農業を教えることができる人はほとんどいないと思います。そのために地域の方々にいろいろお願いすることになるのですが，先生方はそのことをどのように受け止めているのかなあ，いや大変なことを引き受けたなあと思うようなこともあると思います。

実は昨年の春，熱塩小学校の田植えに行ってみたんです。そしたら，一番はしゃいでいたのは学校の先生でした。学校の先生は田んぼに入るなどという経験はここに来るまではそんなになかったと思います。たまたま，先生が田んぼの中で尻もちをついちゃったんです。そしたら下がヌルヌルしていて，なかなか立ち上がれないんです。「助けてくれぇ～。」と声には出しませんでしたが，手をやってもズルズル入っていっちゃって困っちゃったんです。そうしたら，子どもたちがみんなで手を引っ張ってあげて助けたんです。その時の先生の顔が忘れられないのですが，いつも子どもたちを助けて上げるのが先生だと思ったら，「自分も助けられた。」そういう世界が学校の中にあるというのはとても微笑ましい世界だなあと思うんです。

農業科はやりなさいと言われるとなかなかきついのですが，地域の人たちの力をかりながら子どもたちと一緒にやると，先生方にとっても結構面白い世界になるのではないかと思います。喜多方では校長先生方も結構いろいろとやっています。

Ⅴ おわりに――――地域の価値の中に「教育価値」の発見を

最後になりますが，私はこういうことを考える時に，いったい「子どもたちが育つ」というためには何が必要なのかということを改めて問うて見たいんですよねえ。おそらく地域で農業をやってきた人たちは，自分の祖父母やおやじ，お袋からいろんなことを学びながら，自分たちで技や感をきっと身につけてきて，そしていろいろな工夫をしながら，辛いかもしれないが農業を一生懸命やってきたと思います。ですから，そういう人たちの中には，「自分たちが農業をやっていく」あるいは「地域の中に生きていく」という価値がきっとあるのではないかと思います。そして，その価値を大事にしながら，生きているのではないかと思います。

今，子どもたちの育ちを考えた時，先ほど中村さんの話を出しましたが，「農業が人間を育てていく」というメッセージを投げかけて，喜多方ではそれを取入れたわけです。そうすると，「農業で人間が育つ」という時，「地域にある農業の価値」あるいは「農業で生きてきた価値」を，やはり子どもたちに伝えなければならないのではないか，そのことを「教育の価値と考えて学ばない限り，人間は育たないのではないか」と思っているわけです。そういうふうに考えますと，もしかしたら喜多方の試みは，「新しい教育の世界を挑戦的に切り拓いているのではないか」と思います。もう少し言いますと，私も自分でいろいろと農業のことをやっていますが，やはり「自然に生かされているなあ」といつも思うんです。「自然

に逆らわず，自然に生かされながら，一緒になって作物の育ちを支えていく」という暮らしぶりをしているわけです。

この生活ってなんだろうと思うと,「人類がこれまでずっと貯めてきた知恵と力をもしかしたら農業科という形で伝えていけるのかもしれない」「その長い歴史の積み重ねの大事な部分を短時間のうちに子どもたちに伝えていけるかもしれない」「手や足などの感覚の世界，あるいは知恵や技をきちんと身につけながら大人になるということにつながるのかもしれない」と思います。すごいことだなあと思います。

私は今飯館村の５次総という総合計画の策定に関わっていますが。その柱は「までいな暮らし」というものです。「までい」というのは，所謂農業に関する方言で「両手で」「ゆっくりていねいに」「大切に」という意味です。そういうようにイネや野菜を育てると「実をなすものの実が育つ」ということです。横文字で言いますと，スローライフだとスローフーズ，スローエデュケーションということです。この言葉を福島や宮城の人たちはみんなもっているわけです。喜多方の子どもたちの育ち方は「早くしなさい」「もっと要領よくやりなさい」というやり方ではなくて，農の営みを通して「ゆっくり」「ていねい」に育てれば,「いろいろなことを感じることができる」「美味しいものもわかる」「手や足でいろいろなことを感じる力も湧いてくる」「知恵も湧いてくる」のではないかと思います。そういうことは,「子どもを育てること」と「農業科で意図していること」とが重なってくるわけです。また，そういう試みを喜多方ではやっているのではないかと思います。これを実は支えているのが，まったくの「子どもたちのために一生懸命にやりたいんだ」という善意で，しかも無償でやってくれている地域のみなさんということになるわけです。学校でも合的な時間は少なくはなりましたが，この実践を大事にしながら学校を地域に開いて，お年寄りの力をかりて子どもたちの豊かな育ちを地域全体で考えていこうという試みをしているのではないかと思います。

私もこれからまた勉強して学んでいきたいと思います。